

「手仕事の歴史」を求めて

1.

ぼくにとって2度目のパリの春がやってきた。1度目の春は不安と期待とで、おずおずと街に出て心象を刻み込んでいた。2度目の春の今日は、まさしく惜別の思いで街に繰り出した。

やはりぼくにはルーブル宮殿やベルサイユ宮殿は無縁のところだった。いや、未だに無縁のところだと言い直そう。周辺のすべての人が「絶対に行くべきだ」と勧めてくれたけれど、ぼくにはどうしてもモチベーションを感じることがないのだ。なるほどルーブル美術館に行けば、すべてのフランス文化・美術を知ることができるだろう。そればかりではない。エジプト文明にも出会うことができるはずだ。ベルサイユ宮殿に行けば、その建物、その庭園、想像を絶する「華麗さ・豊かさ」を観ることができるだろう。だが、ぼくにとって、「それらこそがフランス文化・歴史の象徴である」とは、どうしても思えないのだ。

さて、おそらく今日で、ゆったりとパリの街を楽しむのは最後となるはず、どこに繰り出したものだろう。

いつものように、これという細かな目的を持たず、最終の到着目的地だけを定め、アパートマンを出た。もちろん地図も持っていない。日本の知人からはパリの花はどんなのが咲いているのだろうとのメールをいただいた。パリの春の花探しもいい。しかし、1度目の春に、やはり花探しをしたけれど、手植えの花は咲いているけれど野草の花をほとんど見つけることができなかったのを思い起こし、知人には「パリはいたるところにある花屋さんが一年中花を咲かせているのです」との返信をしようと考え、花探しを意図的に行うことはやめにした。要するにパリは完全に人工の街なのである。

ペール・ラシェーズ墓地のパリ・コミューンの外壁彫刻がいつ作られたのか、まだ確認していなかったことに気づき、墓地外周壁を目指して歩いた。モニュメントは、何度見ても、見事な浮き彫りである。古い石畳(pavé パヴェ)に使われているのと同型の石が積み重ねられ、朽ち果てたミュール(mur 壁)を形作っている。石畳は、パリ・コミューンをはじめフランスのさまざまな「革命的な市民の闘い」の防御とも攻撃ともいべき象徴である。一つひとつの石(pierre ピェール)に浮き彫りの彫刻が施されている。中央は両手を大きく広げ天を仰いでいる女性像。これはフランス共和国を象徴していると考えられる。その右隣には、両の腕を組んでいるひげ面の男性像がうっすらと彫られている。ひげ面はパリ・コ

ミューンの闘士を象徴している。その他、いくつもの顔・姿が左右に広がる。男性、女性、子ども、さまざまである。苦痛にゆがむ顔、倒れんばかりの姿、そして、顔、顔、顔。弾痕が無数に彫られている。平面彫刻でありながら立体感を強く感じることができるのは、pavéのmurに彫刻されているということが効果を醸しているのだろう。モニュメントの左下にはヴィクトル・ユゴーの銘文が彫られ(雨に晒されたせいか、完全には読みとれない)、右下には1909年に作られたことが読みとれる。



モニュメントの正面にあつらえられたベンチに腰を下ろし、しばらくの間、パリ・コム
ミューンの歴史を頭の中でなぞっていた。産業革命、鉄道の敷設、パリの大改造などがフ
ランスの産業構造に大変革をもたらし、技術職人が失職し、農民は工場労働者の口を求めて
流民と化す。当然「風紀が乱れ」、それに歯止めをかけるべく、いったんは後退していた教
会の影響力が、とくに初等教育において、強大なものとして復活し、教会に認められな
ければ教師にもなれないどころか、教員養成さえできない状況…¹。もちろん、庶民の経済力

¹ 1850年のフランス共和国国民議会で、後に政権をとりパリ・コムミュンに対して熾烈な攻撃を加え、灰燼となさしめたティエールが、「私は数学者の教師よりも、教会の鐘突男の教師の方を好ましく思う。」と演説した。この国民議会であたかもティエールの演説を裏書きするようなファロウ法が採択され、初等教育と教員養成に関するほとんどすべての権限が教会に委譲される

は微細なものとなり、餓死者も出る有様である。その上、プロイセンとの無謀な戦争。これらがパリ・コミューンを引き起こしたと言える。もちろん、パリ・コミューンは、「古き良き時代」のノスタルジーから出来たのではなく、フランス共和国社会を、いかに「近代化」するかという問いを強く持っていた。新しい文化、新しい技術を積極的に進める政策も打ち出し、また実際に推進への舵取りも始めている。パリのパリ・コミューンを担った中心は、ジャーナリスト・文化人の他にフランス社会に伝統的な技術職人であったが、技術職人たちは、その技術の伝統を広く庶民に伝え、技術革新を進めるための職業学校を創設しているのである。

…今日の散策は、それまで具体的に見ることのなかった、パリの技術（工芸）を確かめることにしよう。とにかく、パリの街いたるところに、フランスの伝統工芸を誇る店が無数に出ている。ぼくがいちばん心ひかれるのは、さまざまな楽器である。とくに、古いアコーディオン、ヴァイオリン、オルゴールの類が置かれている店では、時を忘れて、一つひとつを眺めてため息をつく。その次には建築用の彫刻の店である。もちろん彫刻そのものにもひかれるが、工具の多彩さに圧倒される。精緻な彫刻が作られたのには、工具の工夫がさまざまになされていることを知ることができるのである。さらには銅版画、いわゆるリトグラフの版下の類。写真のない時代、実際の風景・人物を見事に彫っている。これらの技術こそ匠という名に値するのだろう。ファッション・貴族文化・美術ばかりがフランス社会なのではないのだ。

2.

地下鉄パール・ラシェーズ駅から数駅で、Arts et Metiers（アル・エ・メティエ 工芸）駅である。人名や歴史的なできごとでない駅名（人名や歴史の名を冠した駅名は、人名やできごとと何のゆかりもないことが多い）だから、駅名にふさわしい建築物があるだろう

ことになる。教会修道士会が数多くの初等学校を設立し、教会儀式化が学校のフォーマルな教育とされ、ろくすっぽ教育についての知識も技術も持ち合わせていない修道士・修道女がその教育の任に当たり、長年教育実践に携わってきた教師たちもこぞって教会に対して従順になる。一方、教会に忠誠を誓わない教師は共和国教師としての資格を剥奪され、公共学校を追われる。追放された教師たちは、教育の国家からの、ということは教会からの自由を求めて、「新しい教育協会」などの自主的な教育団体を設立し、私立学校の形式ではあるが、新学校を設立し、「新しい教育」の実践を進めていく。1860年代には庶民レベルでの「自由な教育」運動が果敢に展開され、教育要求が提出された。彼らの公教育への願いは、「無償、義務（権利）、無宗教」であり、すべての子どもたちに普通教育と初等の職業教育とを保障すべきだということであった。1871年のパリ・コミューンの教育政策にこれらは採り上げられ、ごく短い期間ではあるが、実現をしている。ちなみに我が国でこの教育原則が成立するのは1947年である。

とあてにして下車した。つまり、パリの街中にあるさまざまな工芸を一堂に会した「何か」に出会うことができることを強く期待したわけである。

駅の階段を上り地上へと出た。そこはおなじみの、小規模ではあるが、放射線状になっている。オスマン改革が実施された地域であることが一目で分かった。建築物も 1800 年代半ばの特徴を持っている。きわめて瀟洒で、ナポレオン III 世の「奢り」、すなわち「権威としてのパリ」を感じさせる。星形に広がっていく街路を見回すと、教会建築物が目に入った。その隣はかなり広い庭のある建築物。その庭にエンジニアの銅像が建っている。やはり駅名・地名はゆかりそのものを表していたのだ。念のために案内地図を見ると、**L'ÉCOLE CENTRALE DE ARTS ET MANUFACTURES**（中央工芸学校）が道を隔ててある。パリ・コミューンの時に職業学校をつくっているが、その時にも、ただ機械産業労働者を養成する目的ではなく、フランス社会伝統の「職人」技術、すなわち「手の労働」を守り伝えていくことに腐心しているが、案内板にあるこの学校は、まさしくパリ・コミューンの精神と通じていることが、学校名で分かる²。これはぜひとも訪問しなければなるまい。もともと、ぼくの場合、訪問といっても、ほんの少し内部が覗ければそれでいいのだけれど。

正面玄関から学校を眺める。驚いたことに、玄関から数メートル張り出して、ちょうど大きなゲートのようなモニュメントが建てられていた。ゲートの上には、やはりフランス共和国を象徴する大きな女性像が横たわっている。そしてゲートの上部には、「1914 年から 1918 年、フランス共和国のために死んだ中央工芸学校の在校生及び卒業生のメモワール」と刻まれている。ゲートをくぐり玄関に入ると左手の壁面には、第一次世界大戦と第二次世界大戦で戦死した在校生ならびに卒業生数百名の氏名が刻まれていた。フランス入りして、こうした諸機関、地域を象徴する教会などに、これらのメモワールをしばしば見ており、これもまたその一つなのだと思えばそれまでのことだが、機関を象徴する正面玄関のゲート—戦死者のメモワールのために増築されている—にそれを刻んでいるのは始めて目にした光景である。

学校のカリキュラムなどを一瞥し、技術者の像の建っている建築物に入った。**MUSÉE DES ARTS ET METIERS**（ミュゼ・デザル・エ・メティエ）工芸博物館である。受付で入館券を購入しようと「ボンジュール、ムッシュ」と挨拶。受付係はにこやかな笑みを浮

² フランス・エリート養成のグランゼコールの一つである。



かべ挨拶を返し、なにやら訊ねてくる。要領を得ないと思った受付係は入館券の料金一覧表を向けてくれた。この中のどれかと彼は訊ねているのである。12歳以下、学生、年金生活者、60歳以上、その他にも書かれていたが、老眼鏡を忘れてきた身にはよく識別できない。以上挙げたのは12フラン、その他は25フランである。当然ぼくは25フランに該当する入館者なのだが、受付係は、どうやらぼくを60歳以上とみなしていたようである。まあ、真っ白な顎髭、禿が目立つ頭、眉毛にもちらほら白髪が交じっている…、それらを見れば誰だって「お年寄り」と思う。ぼくは意地でも60歳以上にはなるまいと、25フランちょうどをテーブルに出した。私は技術者ではないし観光者ではないけれども、フランスの手の技術にたいそう興味を持っており、ここを訪ねました、と彼に伝えたが、ただ笑っているだけ。どうも伝わっていないようである。誰一人ぼくの後ろに並ぶ者がいないことを確かめ、すこし彼と会話を交わしたくなった。再度、こんどは身振りを交えながら、試みる。ウィ、ダコウ。ようやく通じたようである。が、その後のこと。ジャポネ？と訊ねてくる。こんどは、ウィ、とこちら。すると彼は、日本語の案内パンフレットを出して渡そうとする。要するに、おまえのフランス語も英語もだめだから、日本語の案内で見学してね、おじいちゃん、と言いたかったのだろう。案内係の青年に、メルシー、ムッシュ、メ、

ル・ギッド・フランセ、シルブプレ、と言葉で返した。青年は破顔一笑、エクスキューゼ・モア、ムッシュ、と、日本語ガイドとフランス語ガイドの二つを渡してくれた。まあ、引き分けるところかと、受付を離れ、チケットもぎのところに進む。若い女性がにこやかにボンジュール、ムッシュと挨拶をしてくれる。本当にフランスは挨拶がていねいである。もちろんぼくも挨拶を返す。すると彼女は持ち場を離れぼくをリードし始めた。おいおい、いくら他に人がいないからってぼく一人にかまわっていていいのかい？でもそれは、ぼくの妄想でしかないことがすぐに判明。受付でのやりとりを聴いていた彼女は、ぼくのことがあぶなっかしくて仕方がないと思ったらしい、2階までエレベーターで上り、それからフロアを一階一階下がってくるといいよ、と案内し、エレベーターのドアを開け、おまけに降りる階のボタンまで押してくれた。ぼくは「手仕事」についての歴史を学びにここに来たのに、「手仕事」から解放される扱いをいただいたわけである。それにしても、フランスという国では、よくこういう場面に出会う。ボロンティエ（自主・自発）という言葉がよく似合う社会だとつくづく思う。

工芸博物館は、おおよそ16世紀から今日までの、つまりマニュファクチャー時代から現代にいたるあらゆる工芸の変遷に関して、実物やモデルを使って展示してある。ぼくがとりわけ興味を持ったのは、やはり建築に関すること、それとリトグラフや印刷技術に関することであった。建築に関することは書籍で確かめてあるので、それが立体化されている展示物を見ると、なるほどと強く思う。博物館は、いわば、技術がいかに人間の「手」から離れていったか、をモチーフとして展示してあるので、ぼくの強く興味を持っている「手」の部分についてはあまりスペースが割かれていない。スペースこそ少ないが、想像性をかき立ててくれるには十分な模型がある。フランス、とりわけパリの街を美しく形作っている石造りの各種建築物は、まず木で建築構造をつくり、それに石を組み合わせで外観・内観を整える。木の部分がやがて鉄骨に替わり、その後石の部分がコンクリートに替わる…。だんだんと、「手」のイメージが遠くパリの建築物を強く感じた。

それにしてもクレーンの発明は見事なものである。動力源としては人間の「手」を使っているけれども、木製歯車の組み合わせによって、上下左右に自由自在に動く。18世紀末まで使われていた木製クレーンの模型の前では釘付けになってしまった。たった一人の人間が羽付の巨大な車に乗りその上で四つん這いになって「動く」と、クレーンが作動する。この原型は古代ローマ時代に見ることができる。四つん這いになって「動く」人間は、きわめて単純かつ重労働。それが10数世紀にわたって続く。人間に替わる動力源の発明こそ、

人間の苦役労働からの、そのことはすなわち束縛された精神からの、解放に直結するのである。

こうした、当然失われて然るべき「手」の部分と、やはり失われなくなかった「手」の部分とがある。後者はリトグラフの版下づくりである。今や、ごく一部の芸術家の表現技術の地位しか占めていない銅版画は、マニファクチャーが進められて以降しばらくは、コミュニケーションの重要な道具としての地位を占めていた。もちろん、銅版画に替わり、活版技術、写真技術、コンピューター技術が進んでくることによって、ぼくたちは、考えもできないほどの大きく、質の濃いコミュニケーション、表現手段を手に入れることができるようになった。しかしながら、きわめて細い線を幾重にも組み合わせることによって平面上に活写する「手」の技術は、いくらコンピューターがドット（点）の組み合わせによって平面上に活写することができる現代になっているとしても、代替のきくものではない。日本で言えば、木版・木版画の世界である。ぼくは、高校生の頃、本居宣長をすこしかじったこともあり、彼の鈴の屋跡（三重県松阪市）をしばしば訪ねたことがある。そこには、彼の膨大な著作の木版が無造作に山積みされていた。その木版を眺めているうちに、その彫り込まれている一つひとつの溝に込められた「手」の知の意味を考えるようになっていた。本居はこの木版の技術がなければ、日本国中に知られることはまずなかったわけであり、当然のこと、その複製版をぼくが入手できるはずもなかったわけである。そうになると、木版を刻み込んだ技術職人が、どれほどにか尊い存在であったのかを感じざるをえなかった。もちろん、機械彫りではなく手彫りであるから、字体一つひとつが微妙に異なる。文字の「美」、行間の「華」すら、生意気にも感じていた。青年期にこのような、受動的ではあるけれども、ナマの経験を持っていると、やはり、異なる文化圏に来て同じような「手」の知に出会うことをとても喜ばしく感じるのである。リトグラフの版下は、骨董市などで入手できなくもない。こんど市があったらぜひとも入手したいものだと、つよく感じながら、コミュニケーションがどんどん「手」から離れていく歴史を眺め回した。

入館して 3 時間ほど、急に人声がしてきた。数十人の団体が来たらしい。そろそろぼくは引き上げる潮時のようである。

再び地下鉄の客となった。目指すはセーヌ川沿いの露天古書店。オスマン計画の詳細について何か述べている書物はないか、パリ・コミューン時代のファッションに関わる書物はないか、もちろん、近現代教育に関わる書物はないか、数十店はあろう古書店をていねいに回ることにした。日本からの便りに啓蟄が過ぎたとあった。もう再び訪れることはな

いだろう古書店は、どの店も、絶好の晴天とあって、屋根の外に本を並べている。フランスの本の虫たちも、ぞろぞろと、出始めたようである。